



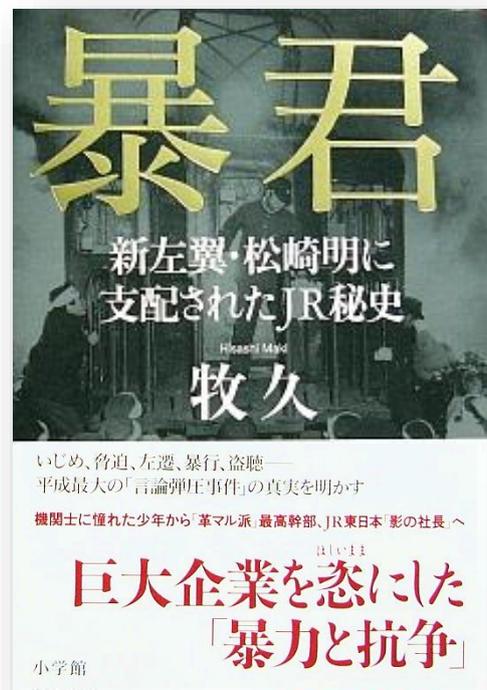
「JRの妖怪」松崎明の真相に迫る！ 牧久氏の著書 『暴君』

4月23日、元日経新聞記者・ジャーナリストの牧久氏による『暴君—新左翼・松崎明に支配されたJR 秘史』が小学館より発刊された。牧氏の著書には他にも、国鉄分割民営化への20年の軌跡を具に検証した『昭和解体』もあり、本書では革マル派の大幹部でもあった故松崎氏の支配の実態のさらなる深層に迫っている。

- 序章 「天使と悪魔」——ふたつの顔を持つ男
- 第一章 “隠れ動労”——JR 誕生前夜
- 第二章 松崎明またの名を革マル派副議長・倉川篤
- 第三章 「労使ニアリー・イコール論」——巨大企業を屈服させた最強の労働組合
- 第四章 大分裂
- 第五章 盗撮スキャンダルと平成最大の言論弾圧事件
- 第六章 革マル派捜査「空白の十年間」の謎
- 第七章 反乱——“猛獣王国”崩壊の序曲
- 第八章 警視庁、「松崎捜査」へ
- 第九章 「D型もD民同へ溜谷に」——漂泊する鬼の魂
- 終章 三万四五〇〇人の大脱走
- あとがき

「コペ転」によって生き残りに成功した「鬼の動労」だが、30年が過ぎた頃になってようやく変化が起こり、JR 東日本では昨年、三万四五〇〇人が“大脱走”した。しかし、亡霊は未だに彷徨い続けている。国家治安問題とも言うべき「革マル派浸透問題」は解決されず、結果、一万人を超える妖怪組織が温存されたままだ。併せてアメーバのごとく存続を目論む新しい組織も立ち上がっている。

牧氏は、週刊誌のインタビューで・・・昨年はJR 東で3万5000人近い脱退者が出たほど組合離れも進んでいる。このような組合不信が続けば、誰が労働者の権利を守るのか、今こそ組合の存在意義について考え直す時期なのかもしれない・・・と語っている。しっかりした主軸となるべき「労働組合」が必要であることは間違いない。‘親睦会’では太刀打ちできないのは目に見えている。



JR連合への結集こそが、労働者の真のあるべき姿を社会に示す「証」だ！